
覇気無き霸王（仮題）

未定

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覇気無き霸王（仮題）

【Nコード】

N2570Y

【作者名】

未定

【あらすじ】

交通事故にあつた主人公。
目を覚ましてみたら、異世界のとある国王になっていた。
戦乱に突入し始めた世界を必死で生き抜く話です。

プロローグ（前書き）

練習作品です。

徒然なるままに書いていくので、何話続くのか解りません。

完結するのか、失踪するのか、そもそも2話目もまだ何も考えてません。

そう言えば、主人公の名前もまだ決めてません。

ブローグ

交通事故は大小合わせて年間70万件以上発生しており、交通事故死者数は年間で5千人ほどになるらしい。

日本の人口が1億3千万弱なので、確率としては0.004%ほどになる。

他の事故などに比べると高い確率らしいが、それでも10万人に4人の確率だ。

まさか自分がとは思ってなかった。

4年間通いなれた通勤路、会社近くの横断歩道。

信号が青に成ったのを確認し、欠伸を噛み殺しながら渡り始める。

誰かの叫び声が聞こえた後に甲高い悲鳴と衝撃。

車が横から足の付け根付近に当り、体がくの字に曲がる。

そして、一瞬の浮遊感の後、壁にぶつかったかのような衝撃。

痛覚が覚えているのはここまでだった。

暴走車に跳ね飛ばされ、対向車線に止まっていたバスに激突、更にそこに暴走車が突っ込んできて挟まれた。

痛覚は無く、朦朧とした意識の中、白黒の視界で周りを見た。

震える手でポケットから携帯電話を取り出そうとして落としてしまった男性。

自分と一緒に轢かれ、運悪く頭がバスと暴走車に挟まれている女性。何をして良いのか分からず、大きく口をあけて茫然と佇む女性。腰に手を当てて立ち上がるとする中年男性。

人それぞれ、違うなーと思いつつ、意識が薄れていった。

ブログ（後書き）

厳しいご意見ご感想は遠慮します。

豆腐メンタルの作者としてはオブライトに包んで頂けると嬉しいです。
w

1話　ここは誰？私はどこだ？

光を感じ、目を覚ましたら見知らぬ天井があつた。

染み一つない白い天井に細かな意匠が彫り込まれており、自室の天井では無かつた。

周りを見ようと起きあがろうとしたが、どういうわけか、体に力が入らなかつた。

仕方が無いので、目線だけを左右に這わせ、周囲を見まわす。

右側を見れば、これまた3畳並べたあたりに白壁があつた。

壁には森と泉の絵がかけられており、その隣に両開きの扉があつた。

左側を見れば、畳を長手方向に3畳並べた辺りに窓があつた。

窓を開けば、そのままテラスに続いているようだ。

その窓から朝特有の清々しい日光が部屋を明るくしている。

そして、窓のカーテンを開けたと思しき女性が居た。

「あゝあゝ」

声をかけようとしたが、しわがれた呻き声しか出なかつた。

呻き声に反応した女性が振り返り、目が合った。

「×□○！直ぐに医者を呼んでまいります！！」

一拍置いて、女性は驚いたかのように声を上げ、右側の壁にある扉から出て行ってしまった。

『ここは？それに今の女性は？』

先ほどからするチクチクとした頭痛に顔をしかめながら考える。

『何でこんなところに？寝る前に何をしていた？』

「グッ！！」

『いつもの朝』『横断歩道』『悲鳴』

霞のかかったようなおぼろげな情景を少しずつ掴もうとするが、比例してチクチクとした頭痛がズキズキとしてきた。

『そうだ、車に轢かれて・・・』

ボタン！

乱暴に開けられた右側の扉から男性2名と女性2名が駆け入ってきた。

「× □ ○ ！」

30代後半か40代と思しき見なりの良い男性。白髪の間違った短い黒髪に厳しい顔、筋骨隆々とまではいかないががっしりと鍛えられた体格をしていた。

もう一人の男性は50代以降と思われる。こちら短めの頭髪だが完全に白髪になっていた。年季を窺わせる皺の多い顔だがヨボヨボと言う印象は無く、むしろ覇気のある鋭い目が印象深い。ゆったりとしたローブのようなのを着ているため体格は解らない。

先ほど部屋を出て言った女性は20代半ばに見えるが、女性の年齢は外見から判断し難い。先ほどは良く見ていなかったので気付かなかったが、紺色の侍女服を着ていた。赤みの強い真直ぐな髪の毛を首の後ろ回りで縛っていた。

最後の女性は10代後半、腰まで伸びた金色のストレートロングが薄い緑色のドレスと良く合っている。薄緑のドレスは派手ではないが細かな意匠が施されており、明らかに高そうであった。碧眼ではなく、赤い、紅の瞳ではあるが、典型的な気の強そうなお姫様と行った感じの女性であった。

「× □ ○ ？」

最後の女性の美しい顔をボケつと見ていたら、4人とも不安げな顔になって来た。

「× □ □ ? ○ × × ?」

50代と思しき男性が声を掛けてくる。

『何を言っているんだ? 聞いたこと無い言葉だな。』

『いや、聞いたことがあるような・・・』

何とか思い出そうとするが、頭痛が激しくなり、眩暈がしてくる。

「× □ ○ ! ? × □ ○ ! !」

息が荒くなり、耳鳴りがし始める。視界がぼやけ初め、掛けられている声は何処か遠くのことのように聞こえる。

薄くなる感覚に反し、心臓の鼓動が生々しく感じられる。

「× □ ○ 様!? 丈× □ か!? エ× □ ト様!?」

ドクンドクンと規則正しく脈打つ鼓動を聞きながら、再び意識が遠のいていった。

1話 ここは誰？私はどこだ？（後書き）

未だに名前が決まらない主人公！
この後どう続けましょうか・・・

基本的に1話1話は短いです。

ガーンと一期に書いて、投稿する時に小分けしたらよいのかもしれない
ませんが、徒然なるままに書く方針ですので、、

2話 「すみません」(前書き)

交通事故にあつた主人公。

気付いてみたら「ここは誰？」

そして、激しい頭痛に意識を手放してしまった。
今回は男女4人側です。

2話 「すみません」

「エリオット様！？ 大丈夫ですか！？ エリオット様！？」
魔導局長のオツフェルトが顔色を真つ青にしてエリオットに声をかける。

ベッドに寝かされているエリオットは苦痛に顔を歪め、呻き声をあげてから気を失った。

「オツフェルト殿。はやり蘇生は・・・。」

ケリーシア女王が顔を曇らせ、『失敗か』との言葉を濁す。

その言葉に、エリオットの父であるアルフェード前国王とエリオット付き侍女のアスーの血の気が更に引いていく。

「ケリーシア陛下、まだ解りませぬ。一度離れた魂がまだ体と上手く繋がっていないだけかもしれません。」

「しかし！ 先ほどのエリオット殿はこちらの言葉を理解している様子も無かった！」

オツフェルトの言葉にケリーシアが反論する。

「ケリーシア女王。落ち着かれよ。」

憔悴していたが、アルフェードは威厳のある声で嗜める。

「しかし！ これは最悪の事態ですよ！！」

ケリーシアが更に声を上げる。

「落ち着かれよ！！」

アルフェードが一喝する。

「確かに最悪の事態の可能性がある。そして、我々王族はその可能性に対策を考えねばならん。しかし、それは冷静になったること。加えて、最悪の事態に関しては既に話会ったであろう。」

正気に戻ったケリーシアが自分の醜態を悔やむ。

「取り乱してしまい、申し訳ありません。」

「うむ。して、どうなのだ？ オツフェルトよ」

「はい。エリオット陛下が倒れられて直ぐに蘇生の儀式をしました

ゆえ、反魂はできているかと。ケリーシア様が懸念されている人形化ですが、それは無いかと思われます。」

オツフェルトの言葉に3名が安堵のため息をつく。

「本当に人形化はないのだな？」

「はい。人形化は鼓動を打つだけで、何も反応しません。痛覚も食欲も無く、体に蓄えられたエネルギーが枯渇すると終わります。対して先ほどのエリオット様の様子ではこちらに反応して目を動かされておりましたし、痛覚もあつたようです。しかし、多少の障害は残るやもしれませぬ。」

「そうか・・・。」

4人それぞれが思考の海に沈みこんだ。

『多少で済めば良いが・・・』

数が少ない蘇生の儀式において、結果は様々であつた。儀式が成功し、倒れる前の状態に蘇る者、蘇生が成功しなかつた者、蘇生し意識もあつたが障害を残す者。

障害の程度はさまざまで、手足に軽い痺れがある程度の者から、酷い者で全身麻痺や乳幼児レベルまで自我が退行する者、そして人形化と呼ばれる状態になる者。

「#”%%”&\$”」

重苦しい沈黙の中、広い部屋にしわがれた声が響いた。

2話 「すみません」(後書き)

やっと設定を幾つか考えました。

けれど、平日は恐らく書かないので、次のUPは土曜日になるかと思えます。

3話 「すみません！」（リテイク）（前書き）

主人公の名前？が出るまで@1話w

3話 「すみません！」（リテイク）

目を覚ますと、気を失う前に見た白い天井が見えた。
目だけを動かして周りを見ると、先ほどの4人が何かを考えるように俯いて立っていた。

「すみません」

思い切って出した声はガラガラに乾いた喉のせいで酷い声だが、気を失う前より舌が動いた。

声に反応して、4人がハッと視線を向けてくる。

「エリオット様、大丈夫ですか!？」

先ほどと同様に老人が声を掛けてきた。

湿気が全くないせい、喋ると喉が酷く痛むことを実感したので、声に対して頷いてみる。

幸い、力が入りにくいが何とか頷くことができた。

「「おお!」」

男2人が嬉しそうに声を上げる。対して、気の強そうなお姫様はまだ堅い表情だった。

「エリオット様、どうぞお水です。」

侍女服の女性はエリオットの喉が渴いていることを察し、そっとエリオットの口に水差しを差し出した。

エリオットは乾いた喉を癒すために一気に水を飲みたかったが、気管に詰まらせないよう、少しずつ飲んだ。

「ありがとう」

気を利かせて水をくれた侍女服の女性にお礼を言った。

「え？」

侍女服の女性は驚いたかのように聞き返してきた。

『え？ 何だ？ 何か間違ったことしたか?』

自らの行動を思い返して見るが、水をくれた女性にお礼を言っただ

けだ。

先ほどに比べ、体の痺れが弱くなってきたけれど、少し手を上げるだけでも辛いので動かしてはいない。

「どうかしましたか？」

考えても解らないので、未だ驚いた表情を浮かべる侍女服の女性に聞いてみる。

「エ、エリオット、今何と言った？」

驚愕！と言った感じの顔で壮年の男性が聞き返してくる。

男性の両隣りにいるキツメの女性と老人の表情は険しい。

「やはり頭に障害が・・・」

「ケリーシア陛下、正常な反応はしているように見えます。耳か舌だけでもしれませぬ」

『脳障害？ 耳、舌？』

エリオットは失礼なことを言われている気をしながらも、現在の意味のわからない状態を考える。

『思い返して見ても「ありがとう」と問題無く発音していたはずだ。彼らの言葉もちゃんと聞こえてるのだから、耳はおかしくなっていないはずだ。』

「A R I G T O ?」

侍女服の女性が外国人らしい非常に訛った発音で聞き返してくる。

その言葉と言うか発音に、正に「はっ」と思いついた。

そして、推測を議論している3人の会話を注意深く聞き、やっと理解した。

彼らの言葉は日本語と似ても似つかないモノだった。

このことに気付いたと伴に、彼はハッキリと眼を覚ました。

「すみません！」

初めて言う言葉のようであり、逆に良く使った言葉のようであった。熱中している彼らの気を引くために強めに言ったので、再び彼らの視線はエリオットに集中した。

3話 「すみません！」（リテイク）（後書き）

初めて小説を衝動的に書き始めてから1週間。

初めて、小説の続きを考えながら仕事をし、家に帰ってきてから文章化すると言うコトをしていましたが、なかなか進まないモノでした。

前話の後書きで次の「土曜に」と書きましたが、その時は「水曜日に一度出せるかな？」とか思っていました。

けれど、実際はなかなか進まずに、後書きの通りとなってしまうした。

アクセス状況を見る限り、定期的に見に来てくれる方が居るようですので、なるべく早くに更新できるよう、頑張っていきます。

4話 幸 or 不幸

さつきまで寝ぼけていたわけではないが、言語の違いを理解してからハッキリと眼を覚ました気がする。

自分は日本人の両親から生まれ、日本で育った近藤 （こんどう） 武だ。

そして、いつもの通勤途中で交通事故に遭い死んだはずだ。

幸運にも死を免れたとしても病院のはずが、知らない部屋で知らない人達に囲まれている。

「あの、ここはどこでしょうか？」

何故か日本語と同じように理解し、話すことが可能な彼らの言葉で聞いてみる。

「エリオット様……。ここは貴方様のお部屋にございます。」

侍女服の女性が言葉を詰まらせながら答えた。

「はあ。ところで、エリオットと言うのは私の事ですか？」

予想はしていただろうが、彼らにはショックが大きかったようだ。

壮年の男性は老人に、後は任せると伝え、キツそうな女性とともに出て行った。

恐らく彼らにとって、エリオットは大事な人だったのだろう。

彼らの視点からでは記憶喪失になってしまったのだから、悲しみも一入だろう。

「エリオット様。お体の具合は大丈夫ですか？ どこか痛むところなどありませんか？」

この老人は恐らく医者なのであろう。

エリオットの腕を取って脈を測りながら尋ねてきた。

「起きた当初は手足がしびれて動かせませんでした、今は多少なから動かせます。」

「ふむ。蘇生された方の初期症状ですな。それは数日すれば問題なく動かせられるようになるでしょうな」

「そうですか、ありがとうございます。ええーと・・・」

「おお、記憶を無くされているのでしたな。私はオツフェルト「ジル」エステットです。エリオット様の教育係をやっております。」

「教育係ですか・・・。」

無駄に広い部屋にふかふかのベッド、いかにも貴族そうな人達に侍女、更に教育係とは・・・。

エリオットという人物は何処の貴族様なんだろうか。

「はい。そして、そちらの侍女はアスー「ローリトン」。貴方様付きの侍女です。」

「アスー「ローリトン」です。これからエリオット様のお世話をさせていただきますので、何なりとお申し付けください。」

そう言うのと侍女服の女性「アスー」は丁寧にお辞儀をした。

先ほどまで泣き崩れるかとも言うほどショックを受けていたのに、何とも切り替えが早い。

女性は見た目で判断し難いが、自分より若そうなのに心身ともにしっかりしているようだ。

「そして、先ほど出て行かれた男性の方がアルフレード「オド」ダーストン様。貴方様の御父上であられます。女性の方はケリーシア「アムド」ロンダルス様。貴方様の婚約者です。」

「はあ!？」

壮年の男性が父親と言うのはある程度予想はしていた。

そして、女性の方は妹か何かだと思っていたが、婚約者だとは・・・。

いかにもお金を持ってそんな貴族の家で、キツそうだが美人な婚約者までいるとは、エリオットはどれほど恵まれてるんだ？

いや、今は自分が恵まれてるのか・・・。

いやいや、27歳なのに交通事故で死んでしまっているので恵まれ

てはいないのか・・・？
あー、頭が痛くなってきた。

4話 幸 or 不幸（後書き）

タイトルや解説（？）から解るでしょうが、異世界モノです。
次あたりで世界設定とかを書いていこうかと思っています。
ありきたりの設定なので読み飛ばしても大丈夫かもw
あ、主人公を万能チートにするつもりはありません。

5話（前書き）

タイトルを考えるのが苦手です。

本項は説明がメインで、全体量は短めです。

5話

あれから、オツフェルトさんから色々話を聞いた。

先ず、自分の名前はエリオット・アムド・ダーストンと言うらしい。年齢は17歳で、自分が死亡した年齢より10歳若い。

そして、自分はダーストン国の国王らしい。

聞いた時は正直、信じられなかった。

17歳で国王？ 先代が亡くなって代替わりならまだ解るが、父親であるアルフエード・オド・ダーストンはまだ生きている。

詳しいいきさつは後で説明してもらえとのことだが、実務の大半は父親と各大臣が行い、それを追認するということなので、エリオットがことさらに優秀だからと言うわけではないらしい。

そして、死ぬ前の世界とこの世界は異なるということが解った。

こちらの世界には魔法があったのだ。

オツフェルトが魔法を使うのを見せてもらったので、宗教とかにハマっているとかではないようだ。

実際に指先に火を灯したのを見てかなり驚いた。

あまりにも驚きようが滑稽だったのか、侍女のアスーに笑われ、オツフェルトには逆に驚かれた。

他にも、色々説明を受けた。

エリオットには2歳上の兄が居たが、残念ながら亡くなれていること。3歳下の妹が居ること。母親は妹を産んだ時に亡くなれたこと。

エリオットが8歳の時からアスーが侍女について世話をしてくれてきたことなど、家族構成など身近な事を教わった。

当たり前だが、恐らくは記憶を思い出してほしいのだろう。

この世界の事などをもつと聞きたかったが、病み上がり（蘇り？）なので、説明は中断となり、一旦寝て休むように言われた。側に女性が居るためなかなか寝付けないと思ったが、体は疲れていたのか、案外あっさりと眠れた。その後、昼前まで眠った。

5話（後書き）

なかなかテンポの良い小説が書けません。

本来なら前の日曜日に出したかったのですが、色々試行錯誤してたら、日曜日が終わってましたorz。

6話 天国のような地獄のような（前書き）

本話は特に進行はありません。

6話 天国のような地獄のような

「エ……様、起きてくださいエリオット様。」

人に起こしてもらうのなんて、何年ぶりだろうか……。

時計が無いので解らないが、睡眠量が中途半端なためか、目がショボショボする。

「お昼ごはんになりますが、お体のお加減は大丈夫でしょうか？」

「ア、アスーさん。大丈夫ですよ。」

ぼやけていた視界が直ると、直ぐ近くにアスーさんの顔があった。これほど近くに、異性（しかも美人の！）に近づいたことが無かったので、顔が熱くなってくる。

「そうですか、良かったです。お昼は料理長が色々工夫して作ったそうですので、食べやすいと思いますよ。」

アスーさんに上体を起こすのを手伝ってもらう。

「はい。お食べください。」

「ありがとうございます。」

アスーさんがちよつと深めのスプーンにスープを掬って口元に持ってきてくれる。

何のスープかはよく分からないが、やや緑がかっておりトロみがある。

初めて嗅ぐが、ほんのりとした良い香りが食欲をそそる。

ほんの少し口に含み、飲んでみた。

メチャクチャ美味しと言うわけではないが、程よく塩分があり、食べやすかった。

「これは何のスープ？」

「はい。薬草を初め、体に良い葉物をすりつぶしたスープです。小麦粉とジャガイモのすりつぶしでトロみを出し、タジンの葉で香り

付けをしています。」

タジンの葉というのが何なのか解らないが、前世（？）と同じか似たような食材があるらしい。

「はい、エリオット様。あーんしてください。」

美人のお姉さん（前世の年齢で行くと年下の可愛い娘）に「あーん」をしてもらえるなんて想像もしなかった。

手足がしびれていなかったら、嬉し恥ずかしで布団を引っ被って悶えていただろう。

嬉し恥ずかしの天国から来る表現のし難いパトスを耐える地獄の状況で、何とかスープを完食できた。

「スープはどうでしたか？ 食べにくい点などありましたでしょうか？」

「いえ、大丈夫ですよ。とても食べやすかったですし、美味しかったです。」

「それは良かったです。」

アスーさんがそう言って、胸をなでおろす。

「あ、分量はもう少し増やして欲しいです。」

「解りました。料理長に伝えておきますね。では、食器を片づけてきますので、エリオット様はお休みください。」

アスーはそう言ってワゴンを押して出て行った。

目覚めてから3日間、朝と昼に軽く一般常識の説明を受け、後は寝るだけと言った生活をしていた。

6話 天国のような地獄のような（後書き）

正直、次のステップに移るための間を作るのに苦労しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2570y/>

覇気無き霸王（仮題）

2011年11月20日16時56分発行